

会議名	東北大学百周年記念セミナー（科学が次の百年で創り出せること） 第6回「文明の危機とグローバルコミュニティの再生」
開催日時	平成18年8月2日（水）；13：00～17：00
開催場所	日経ホール（東京都千代田区大手町）
主催者	東北大学、日本経済新聞社
参加人数(概数)	約600名（同大学卒業生を含む公募者の中から抽選による招待者）
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>このセミナーでは、人類社会が今後100年間で直面する問題に、人文・社会科学を含む科学がどのような貢献をなすうのかを探求している。今回は標記のテーマ「文明の危機とグローバルコミュニティの再生」により、講師は何れも同大教授により下記の話題について、最先端の研究成果を基に講演が行なわれた。</p> <p>「地球大災害と国際協力」工学研究科：今村 文彦 「グローバル化とヒトBSEの脅威」医学系研究科：北本 哲之 「国境を越えるウイルス感染症～鳥インフルエンザと地球規模大感染の危険性～」 医学系研究科：押谷 仁 「プラスチック地雷を見つける電波技術」 東北アジア研究センター：佐藤源之 「グローバルネットワークの光と影」 情報科学研究科：根本 義章 「オーロラから見る地球の未来」理学研究科：福西 浩</p> <p>この中から畜産技術に直接的に関係する2つの話題について、以下に報告する。</p> <p>「グローバル化とヒトBSEの脅威」 北本 哲之 氏（病態神経学が専門で、WHOのクロイツフェルト・ヤコブ病の共同研究センターに指定され活動している。）</p> <p>1980年代BSE(牛海綿状脳症)は多くの人にとって、英国やヨーロッパだけの問題としか捉えられていなかった。しかし、飼料や牛肉流通の国際化によってBSE汚染が世界中に広まった。現時点のBSE汚染は収束しつつあるが、BSE由来のバリエーション型ヤコブ病(ヒトBSE)の汚染が水面下で広がりつつあるのではないかという新しい問題が出てきた。ウシBSEの感染性に比べて、ヒトBSEの感染性は遥かに強くそして広範囲のヒトに感染を引き起こすことができるという研究結果が出てきた。</p> <p>つまり、ウシからヒトに種の壁を乗り越えたプリオンは、ヒトに対して容易に感染できる能力を獲得した。ヒトBSEは世界中に移動するヒトの体を借りて、輸血・移植・手術・観血的検査などの医療行為を介しての二次感染を引き起こすのではないかという新たな脅威を顕在化させつつある。</p> <p>講師は潜在的脅威の例として、ウシBSEが英国から世界へ感染したと同じようにCWE(シカ慢性消耗病)が北米から世界への感染が疑われるとし、米国で鹿ステーキを食べるのは危ないとした。</p> <p>「国境を越えるウイルス感染症～鳥インフルエンザと地球規模大感染の危険性～」</p>

	<p>医学系研究科：押谷 仁（JICA 専門家、WHO 感染症地域アドバイザーとして活躍、現在同学の微生物学分野教授）</p> <p>地球上から撲滅されたと思われていた感染症が HIV、BSE, SRAS, ニパウイルス、鳥インフルエンザ A（H5N1）などの新興感染症として再びヒトに脅威をもたらしている。</p> <p>現時点で人から人への鳥インフルエンザ感染は限定的にしか起きていないが、インフルエンザウイルスは変異を起こしやすいウイルスとして知られており、その出現可能性が危惧されている。人類の大多数は、H5N1 による高病原性鳥インフルエンザ A に対する免疫を全く持っていないので、世界人口の 20～30% が感染し、1 億人以上の死者も想定されている。このような大規模な感染が起きた場合、医療だけの問題に止まらず、社会全体に深刻な影響を及ぼすことが考えられ、国家的な危機管理の問題として対策を考えておく必要がある。</p>
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名	<p>同大学の百周年記念募金と裏腹の関係にあるセミナーで、その目的のためにも招待された方も多いうように見受けられた。取り上げた話題について、日頃から BSE や鳥インフルエンザの話に馴染んでいるわれわれ畜産関係者としては特に目新しいことはないが、日頃は食にも消費者問題にも関りの少ない異分野の人が、医者から自分の命に関わる話を初めて聞かされ、驚かされて、かなりの恐怖を感じ畜産に対して要らざる用心を持たせるのではないかと危惧させられる。</p> <p>この大学に獣医学の研究者がいないので止むを得ないことかもしれないが、せめて畜産学関係の研究者が、このようなセミナーにはその専門分野からこの問題に関連するような話題の一つも出してもらいたいものである。</p>
3. その他の発表課題で関心のあったもの	
4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等	
5. 会議の所感	<p>開会挨拶で東北大学学長は百周年記念事業としている青葉山キャンパス建設に触れ、農学部も移転する新キャンパスは環境調和・市民との交流も主要な命題であると紹介され、緬羊や山羊が写っているビデオも上映された。</p> <p>新キャンパスの用地はかつては県有地のゴルフコースで、その明け渡しについては裁判沙汰になった経緯もあり、片平町キャンパスの一部も同時に移転することによって、面積的にも農学部が実用規模での畜産技術研究のために必要な用地を確保することは困難と思われる。しかし、環境調和型畜産技術研究、畜産と市民との触れ合い、動物愛護に関わる技術開発の場として有利な立地と考えられる。現農学部の畜産関係研究者の腕の見せ所と考えられる。</p>
報告者	針生 程吉